

進捗状況の概要（1ページ以内）

本事業は前述の「事業の概要」に記載の取り組みについて計画に従って実施され、令和4年度の実績を上げている。令和4年度の本事業の「教育面」での実績は次の通りである。令和4年度に新規開講を計画したインテンシブ授業は全て開講した。その上で、学生到達度のアセスメントを実施し、学修成果を確認した。令和5年度はさらに学習効果を高めるべく、授業内容や開講のタイミング等を改善する。令和4年12月にはビジネスプランコンテストを開催し、一次選考を経て12月の最終選考を迎えた。審査員には各分野の第一線で活躍するリーダー招聘し、有望なビジネスプランや、社会を変革しうる新しいビジネスモデルを提案するプランが出され、活発な議論が繰り広げられ、実りあるコンテストとなった。今後さらに参加者数を増やし、レベルアップを図る。令和5年度に新規に開講されるインテンシブ授業「事業構想基礎」とビジネスプランコンテストの擦り合わせを図る。

令和4年度の本事業の「評価面」に関する実績は、次の通りである。4年次の学生を対象にした「LG (Learning Goals) 到達度評価」を例年通り実施したことに加え、令和4年度に新規開講したインテンシブ授業「フィールド実践」の2年次の受講生を対象にした「LG 到達度評価」も実施し、一定の学修成果を確認し、次年度に向けての改善課題を見出した。次年度に向けて、授業内容及び教授法等の改善を図る。さらに「フィールド実践」の授業においては、当初から計画していた「LG 到達度評価」に加え、学生自身が回答する「学修行動調査」を追加で実施するに至った。調査を通じて様々な知見や示唆を得るに至っており、調査結果を教育学的視点からの研究成果としてまとめていく可能性についても検討し始めている。その他、令和4年度の本事業の達成状況等を客観的に評価するために、外部評価を実施する。評価委員として、京都大学 松下佳代氏、HBS 日本リサーチ・センター長の佐藤信雄氏、有識者の3名を招聘する（6月実施予定）。次年度以降も引き続き、外部評価を実施する。

令和4年度の本事業の「成果公表」に関する実績は、次の通りである。令和4年度は、本事業の学外への案内配布を計画していた。令和3年度に作成したリーフレットを改訂した上で、学外関係者に配布した。高大連携事業等の広報活動の際に配布した。令和5年度は、中間報告会兼フィールドメソッドシンポジウム、フィールドメソッドハンドブック発行を計画している。

採択時に付された留意事項への対応も図っている。1つ目の「URAの位置付け・役割」については、「産学連携支援」や「教育支援」の役割を主として担う人材を採用し、インテンシブ授業での支援を行った。2つ目の「科目や教育課程の編成」については、本事業の履修モデル（別添資料1）に基づいてカリキュラムの体系性や科目間の関連性を明確にした上で、ゼロベースで内容を見直して開講した。3つ目の「本事業の全学への効果的な波及の具体策」については、令和4年度において、商学部でインテンシブ教育を実施・検証し、学内での検討を経て令和5年度には経営学部でインテンシブ授業「AI実践」を開講し、令和6年度には全学でインテンシブ教育を導入することを計画している。4つ目の「学生の主体性の涵養・ケースとフィールドの統合・学修者本位の学びの実現・学生へのケアの充実」については、次の通りである。まず「学生の主体性の涵養」については、上述の通り、「フィールド実践」の授業において、教員による「LG 到達度評価」に加え、学生自身が回答する「学修行動調査」を追加で実施した。その中で、「自分たちの思いを最も大切にして授業に取り組んだ」「自分にとっての楽しさややりがいを最も大切にした」「授業での動画づくりをチームで楽しんだ」等の項目で、学生から高い評価を得ることができた。「ケースとフィールドの統合」については、令和4年度において、インテンシブ授業の科目内で、ケースメソッドとフィールドメソッドの双方を取り入れた授業を実施したり、インテンシブ授業の科目間でケースメソッドとフィールドメソッドの往還を図ることを実践した。今後は学生自身がケースメソッドとフィールドメソッドの往還（統合）を意識したり、実感しながら学びを得られるように、より一層の改善を図る。「学修者本位の学びの実現・学生へのケアの充実」についても、インテンシブ授業の中で、丁寧なケアを進めているところであるが、「フィールド実践」の授業で実施した「学修行動調査」の結果等も踏まえつつ、次年度以降に向けて改善を図る。